

# 幼 兒 教 育

第十九卷  
第三號

大正八年三月一日發行

## 斯く育てたしと思ふこと

——日本幼稚園協會二月常會の講話——

倉 橋 惣 三

今日は、權田文學士を煩はして、私共、御一緒に「おもちゃ繪」のお話を伺ひ、また多數お集めになつた珍しい繪をゆつくり拜見するのが主なる目的であります。丁度、戸外には奇麗な雪がさつきから大分積つて居ります。こんな日に、靜かな室に集つて古風な「おもちゃ繪」を拜見する事は誠にふさはしい趣味深い事と思ひます。其の樂しみを後に仕舞つて置いて、私は少しばかりの間、「子供を如何に育てるか」とどう育てたいと思ふかと云ふ事を御一緒に考へ見たいと思ひます。

扱て、此の「斯くの如く子供を育てたしと思ふ」

と云ふ題は、私が自分で出して置いてかう申上るのも可笑しいわけですが、多分皆さんの御興味をひく問題であると思ひます。今日は家庭の方々もお見えになつて居る様ですが、子供をお持ちの方々、また幼稚園の教育者として、「如何に子供を育てるべきか」と云ふ事は、極めて大切な、又緊急問題です。所がまた考へて見ると、かゝる題ほど一場の演題として不適當なものはないのであります。即ち「子供をどう育てるか」と云へば誰れでも立派な人間、完全な人間、圓滿な人間にしたい。要するに、彼方も此方も、一つの落度も偏よる

處もない様に、完全無缺に育てたいと思ふ他はないので、其の中の特に一つ二つをぬいて「これこれだけ」と云ふ事は出来ません。例へば「からだを丈夫に」と云ふ。それでは心はどうでもよいときけば、勿論心も立派にと云ふ。惻巧にしたい。——それぢや惻巧だけでよいかと云へば、いえ、それ丈では困ると云ふ。人間は兎角慾張りなものです、其の中でも親とか教育者とか云ふ人々の持つ教育目的位、慾張るものはありません。

斯ういふ譯で、そのあれもこれもの中から、「斯くの如く……」と云ふ一つを示して考へる事は面白い様で其の實六かしい。殊に一方に偏するものになりやすい。假りに一つ二つを云つたとて「それ丈けでよいか」と云はれば勿論そうでない。今日私が「かくありたし」と申上げるのも、それだけでよいと思ふのではありません。それだけが教育の目的であると、誤解して頂かない様に願ひます。つまり今日のお話は、このごろ私の特に心

に浮べて考へて居ることを隨感的に申上げるので幼児教育の目的論を理論的に整理して申上げるのではありません。之れは豫めお含みを願つて置きます。

そこで、勿論此處で申上ますのは幼稚園期の子供——學齡期前——を主としてでありまして、従つて、大體に於て智慧をつけるのと云ふ事よりも訓育と云ふ様な方面になるのでありますが、此の時期の子供の訓育上、最も願はしいことは、是非心すべきことは子供に道德の意識を持たせたくないと思ふこととあります。之れは一寸妙なことを申す様ですが、私は切實にそう思ひます。例へば子供が正直な事をするにしても、「かくく」の事が正直である」と知つたり或は「自分が今、正直をして居る」と氣がつく事のない様にしたいたいものだと思ふのであります。つまり道德を出来るだけ意識生活にさせない様にしたのであります。

處が從來の所謂道德教育では、道德の意識とい

ふことが主になり過ぎて居る様に思ふ。換言すれば子供に餘り早くから道德の名稱を教へ過ぎると思はれるのです。これが正直、これが勤勉などといふ風に自分や他人の爲て居る事を道德的名稱に於て意識させ過ぎるのです。しかも我々の望む所はなるべくこの名をつける事をさけたいのです。

假りに實際問題を捉へて申しますならば、此處に先生が「親切」についてのお話をなさるのを聞いて居ますと斯ふいふ風に話される。——雪の日に坂を車をひいてのぼつて行く人がある。後から太郎さんが車を押して上げてゐる。太郎さんは何をして居るのでせう。——先生が斯うお尋ねになると一人の子供が「それは太郎さんが車を押して上げて居るのです」と答へる。すると、先生は「そうではない」とは申されませんが、何だか飽足らぬ顔つきで「もつと何か外の事をしてはいませんか」と言はれる。すると、組の中でも特に惻かな評判のある子供が「先生、それは親切をして居る所で

す」と答へる。是に至つて先生は出かしたりとばかり、「そうですね、そうですね。これは親切といふことをして居る所なのです。さあ皆様一所に云つて見ませう。親切!!」。子供もいつしよに口を揃えて「親切!!」。そこで先生は得意顔で『そうですね、わかりましたネ。親切といふことを忘れてはいけませんよ。皆も親切をしなければいけませんよ』と。

それから二三日経つて、又先生が『先日は何のお話をしましたか』と聞く。大低の子は忘れてしまつてゐるが、級の中でも記憶のよい子供が、『先生親切のお話』と答へる。先生は「そうですね、よく覚えてゐました」とほめる。また他の例をとれば、此處に一人の子供が何か過ちをしたとする。先生が答めると其子は無邪氣に有りの儘を答へる。すると先生は其の子を皆のまへにつれて行つて、『太郎さんは實にえらいです。皆さん何處がえらいか分つて居ますか、知つて居る人は手をお上げなさい』すると一兒が『太郎さんは正直です』先生は

ニコ／＼して『そうです。太郎さんは正直者です。皆も太郎さんの様に正直者にならなければなりません』と云ふ。これ等は一例に過ぎませんが、皆さんは斯ういふ道徳教育なるものを何とお考へになりますか。

我々の心の中にある事、身に體せる事を何とかして言葉でまとめてしまひたいのは人間の一つの慾望です。そしてこれとこれとは親切であるとかいや、これは勤勉の部に屬するとか云つて居る。

之れは知的生活としては已むを得ぬことですが、併し、これが道徳教育の上に於ては實に有害であると思ふのです。無駄な事ならまだしも我慢も出ませんが有害であるとは私は思ふのであります。私は何も人のして居る事を批難するわけではありませんが近來いろ／＼の所で子供の徳性の研究を試みられるのに、いつも道徳意識を調査する。其方は大きな兒には何か書いたものにより、幼兒には話をして問答するので例へば『一番よいと思ふ

徳は何か』と問ひ、これに對する答を集めて、忠と答へたものが何人、孝と答へたものが何人、親切と答へたものが何人、思ふ事を爲しとげる事と答へたものが何人、などと統計をとるのであります。之を逆にして行へば、「正直とは何ぞ」、「親切とは何ぞ」、「忠とは何ぞ」……などと道徳の定義を答へさせて其結果を調査し、何才では如何なる道徳意識があつて年齢と共に進歩の状態はどうであるかと云ふ類の事を見るのであります。この道徳意識は單に心理的に兒童の觀念内容の調査といふことならばそれでよいでせうがこの言葉をいくつ知つて居ると云ふ事で兒童の道徳生活の實際を知らうとするのなら大間違ひです。山の名をいくつ知つて居るか、河の名をいくつ知つて居るかと云ふ事と同様に道徳の名稱をいくつ知つて居るかと云ふ事を調べるのは一種の觀念内容の調査としては面白い事でせうがそれと道徳教育の効果如何と云ふ事とはどうしても混同する事は出来ません。

出来るだけ道徳意識を與へないで子供を育て、  
彼等の世界から全く『道徳といふもの』を取り去  
る事は出来ないであろうか。もし之が出来たとす  
ればかゝる間に育つた子供が成長してつくる社會  
——大人の世界——はどんなものであろうか。私  
は道徳の言葉、其觀念、其意識のない處に、或る  
大きな幸福がありはしまいかとも考へるのです。  
それ故に殊に學齡前の子供には出来るだけ其道徳  
生活を意識の上のぼせない様にしたと思ふの  
です。これが私の一つの希望なのです。

道徳上の言葉を教へると云ふ事は單に、つまらな  
い事であると云ふ計りではありません。教へると反  
つて道徳教育の害になるのです。皆さんも常に考  
へていらつしやることでせうが、私共はよく、『頭  
で考へた道徳ではいけない。體驗しなければなら  
ぬ』と云ふ警告を聞きます。然るにこの「體驗」す  
る事が實に難しいので、道徳上の言葉は、云ふ事も  
考へる事も出来行ふ事も又必ずしもそんなに難し

くはないけれ共體驗する即ち知らずくに其氣持  
にはいつて居て思はず善い事をする程に自己が道  
徳的になつて居ると云ふ事は誠に困難な事であり  
ます。之れは何故でせうか。この原因については  
私は私の幼兒期を教育して呉れた人々に對して怨  
みがあると思ひます。我々は小さい時分から「よ  
い事」を云つたり行つたり考へたりする様にのみ  
教へられました。私共が自分でも何とも意識せず  
ウツカリして居ることを、オセツカイな教育者は  
「お前のして居る其の事、それが正直といふことだ、  
道徳といふものだ」など、教へて呉れました。誠  
に自然にしておけばウツカリとよい事をして居る  
のにそれを一々意識にのぼる様に取扱つては其度  
びに折角の眞な自然の體驗を壊してしまつたので  
す。つまり道徳を餘り意識にのぼせつけたことが  
害になつてしまつて、今となつて體驗の困難を感  
ずるのです。

そこで、お話が少し飛びますが、次には道德の名稱にもよらず、意識にもおぼらせないで、どういふことを訓育の目的にするかと云ふ事でありま

す。今日のお話は寧ろ此點を主にしたいのですが扱て此處が至難の點であります。私自身もこれより先はまだ分らないことが多いのですが、長らくろく迷つて居る中にも今日到達して居る一つの點を申上ますならば、それは『人の好意を感じる性情』といふ處にありはせぬかと思ふのです。もつと適切に言へば人の好意を受くるに敏感であると云ふ事、この心持か道德生活の基本で、幼兒の訓育の目的標準もこゝにあると思ふのです。子供は何と云つても子供ですから例へば清潔にせよと教へられ其言葉もよく承知してゐながら實際彼が弱きために出來ぬ事がある。又『人に對して親切なれ』と云つたとて何處迄彼等が之をまもる事が出来るでありませんか。子供が眞に體驗し得る道德生活を要求する事は中々無理困難な事に相違な

いが、しかし他人の好意を感受すといふことだけは、これは是非子供に持たせ得る、又持たせたいことと思ふのであります。

この私の云はんとする心持に極く適當した言葉が見當らないのですがこれは先づどうでもよいとして實際上子供を教育するに他の道德に關する事は随分致しますけれども、他人の好意を素直に受取つて之を感ぜさせると云ふ事は、誠に簡單な事でありながら却つて實際行はれて居りません。

我々大人の道德修養に於ても、例へば一ヶ月間の統計を取つて見れば、それは延引ならぬ時には嘘も云ふでせうし、つい不親切なこともするでせうが、大體を通じて我々はそんな鬼の様に故意な不親切者でもなく不正直者でもないと思ふが一番我々に缺けて居るものは人の好意を敏感に受入れると云ふ事ではありますまいか。しかもこの根本的のものなしに道德を築き上げる事は全く無意味な事となりはすまいか。正直のための正直、勤勉

のための勤勉、親切のための親切、などよく云ふけれども、理屈の上では兎も角も、實際人間は純粹に道德のために道德を實行し得るものでせうか。それよりも、我々人間の爲し得る事、また爲さねばならぬと教へられる事も、之をその源に溯れば先づ他人の好意を受け取り得るに始まるのでこれがなければ正直と云つても親切と云つても本當に身に體した力あるものとなる筈がないと思ひます。繰りかへして申せば、今日我々自身の行爲を假りに表につくつてあらはして見ますならば、正直もしてゐます、親切もしてゐます、決して謂ゆる不道德な事が多いとばかりは云へません。しかし其の正直なり親切なりの行爲が自分の何處から出發して居るのかと考へると其根底が頗る弱いと思ふ。我々は何故道德的行爲をするかと一歩溯つて考へ見ますと『道德だからする』しなればならぬからする』と云ふ所に歸着しやすい。こゝが——即ち道德なるが故にと云ふ出發點が——我

々の行爲に眞の力のない所以であると思ひます。

もし人が捨鉢になれば道德を羽織をぬぐ位に容易くぬぎ捨てる事も出来やう。世の中から退け者になつて悪人になつてもかまはないと云ふ度胸さへあれば、道德を捨てる事は實に容易い事であらう。斯うなると私は再び『我々道德生活の根底は何處であるか』と尋ねたい。『良心の命令である』とかいろ／＼答も出ませうが『道德が自己の本眞劍の生活の何處に位してゐるか』とかう考へるならば或る場合には衣であるかもしれぬ、或場合には一寸貼つた膏藥位、或場合には帽子の様に、又帽子の先に一寸ついてゐる飾の様なものにすぎぬものかもしれない。かうして見ると實に危険あぶなしい人だらけでせう。我々はよくお互に道德上の煩悶を語り合ひます。殊に學問をした青年男女からよくかゝる話を聞くのですが、其の發表の仕方は何れにせよ。極く奥の奥の一番の根本問題は『我々は何故道德を守らねばならぬか?』『何故道德が眞理

であるか』と云ふ事に落ちて来る。つまり根底に此の問題の解決に苦しんでゐる所へ色々反對の思想が無遠慮に彼等青年を襲ふ。そこで例へば一人の先輩が何んとか説明し解決を與へるとしても、其時は兎に角として、この青年が他日一層頭の進んだ先輩に出會へば又違つた『道德の解釋』をうける。かくして常にぐらつくのでありませう。一體道德はいくら説明がついても立派に解釋してもそれは頭の仕事、意識の上の事で教へられた事と實際の生活との間に結び付きがなければ何の役にもたへないことです。

扱てこれらの結論解決として私はまた初めの問題に歸りますが、他人の好意を感受すると云ふ事に於ても其好意の結果を感ずる事は先づ容易な事です。一飯をめぐまれたとか或人から幸福をうけたとしてそれを後々迄も忘れないと云ふ事は誰でも出来ませう。しかし好意其のものを本當に感ずる事、こゝになると余程我々の心は鈍くなつてゐ

ると思ふのです。そこで『人の好意を感ずる』と言ふ事を押しひろめて考へると、道德と云ふ事は今、この言葉を出してゐるから、今この行をしてゐるから、それだから道德であると云ふのでなく、其の人の生活全體が道德になつて居ると云ふ事になりませう。云ひかへればあの人が何日の何時に私にかく／＼の事をして呉れたから私はあの人の好意を感ずるとか、誰か私に好意をもつて居てくれるのではないか、何處かに私のためにしてくれる人が居はしないかと探しまはると云ふ様な性質のものではない、丁度春が來ると何處の水でも暖かくなるのを感じ得る様なものです。特に意識して『春が來た、何處の水は暖くなつたであらうが此處のは暖くならぬに違ひない』など、えりごのみをするものではありません。たゞ常住始終一種の好意に感ずる性能を持つて居るので、これはかの物理學者がすべての物體をわけて電氣の良導體、不良導體の二つにして居るのに例へて、良導體の様



なものだといへませう。即ち金屬は電氣が來て之に感じたその時だけが良導體で電氣が來ない時はそうでないとは云はない。電氣が來ても來なくても『金屬は電氣の良導體である』と物理學者はきめて居るのです。之と同じく人間も好意の良導體となれば今好意をうけてゐるから、ゐないからと云つて其性能のかはるものではない。又其の金屬は電氣が通つてゐても通つてゐなくとも何とも思つて居ないでせう。もし鐵に『もし〜鐵さん今電氣が通つてゐますがどんなにお感じですか』ときいたなら、或は『少し緊張した様です』とか『何だか、くすぐつたい様です』とか答へるかもしれないが、まあ恐らく何とも意識して居ないでせう。

扱人間は、もし、好意の不良導體から良導體に變つた時どうであらうか。必ず其内の生活に變化を來すと思ふ。良導體にかはれば實に好意をいつも受けてゐる様な感を持つ様になる。特に何日の何時にこれ〜の事をしてもらつたと云ふのでな

くて、何となく嬉し、い、有りがたいと云ふ感じ、それが其の人の基調になる、生活の基調になる。雪を見て、水を見て、たゞ何となくうれしい。取り敢へず好意をうけて居る様な氣分になる。それが其の人の性格の基本となるでせう。私はこの事なしでは眞の道德生活と云ふものを考へられないのであります。道德は道德として平常は棚にあげておいて扱今日は病人の所へ見舞に行くのだが何を持つて行かうか。そうだ親切がよからうと其時に『親切』を棚から下して風呂敷に包む。今日は悪友の所へ行くのであるから、柔順ではいけない、勇氣を持つて行かう。こんな風ではとても道德生活に落付く筈がありません。必要に應じて一々準備するのになしに、全く空手からてでブラリと出て行つて、さてある所に行けば勇氣となり、或所に行けば親切になると云ふ其根本となるものがある筈と思ふ。この根本を私は『好意に感ずる性質』と云ふ事があると申したいのです。たゞ何となく絶

えず嬉しいと云ふ氣持をもつて居たい。私は先月來、可成長く病床にありました時其間に特に親鸞聖人の事を考へてゐましたが、親鸞の宗教的の根本信念も此處にあると思ひます。淨土に行けると云ふ事は道德的の行爲によるのだといふ聖道淨土の信仰に對して親鸞のは全然信仰往生を唱へました。親鸞の先生の法然聖人は道德に由つて救はれる事を非として念佛に由つて救はれると云ふ事を云ひ出しましたのを親鸞は更に信仰往生を唱へたのです。

私は常に親鸞が妻帶肉食した事を偉いと思つて居ります。今日の時代ならば何の不思議もありませんが、あの時代に、殊に法然の一番弟子の身が妻帶し、肉食し、子供もあり家庭も持ち、毎日寺に通ふたと云ふ事は大變な事であつたに違ひない。實に親鸞はよく思ひ切つて生活の形に由つて救はれる事を非として、信仰往生に進んだのであります。つまり道德から今一步すゝんで何處かに

歸着點を見出したいたした時に親鸞は自力から純他力に移つたのであります。他力とは何であるか、即ち人間が道德をまもると云ふ誇りまでもすてるところで、全くの他力に由つて信仰往生に入ると云ふ事は實に他力の極と云へませう。さて之れを主觀的に見ればつまり嬉しい、有り難いと云ふ事に歸着するものではありませんまいか。

かゝる事を考へながら病中私は親鸞の書物を枕元においてあれこれと讀みあさりましたが、要するに今日の我々の上に起る種々の問題は此處に根庭を置くと思ひます。我々は果して嬉し、さの良導體であるか、人の好意に對する嬉しさと感謝性を持つて居るか、これを理窟の上で押しつめて行けば宇宙に對し、自然に對し、神に對する感謝の心となりませうが、其處迄進まず、人間の問題はやはり人間の間だけで考へるとして、人間はやはり人間の間で生活するのですから、たとひ如何に神の有難さを感じても人間の好意をうけられず感

受出来ない人は、私は淋しい人、氣の毒な人であると云ひたい。兎に角私は人間世界の好意を感じ得る人となりたい。又子供をそう育てたいと希ふのであります。

しからは實際上どうすれば子供をこの希望になう様に育て得るか。こゝになるとまた餘程注意を要します。たゞ感傷的センチメンタルになつては困る。何でもかでも謝するのがよいと云つて之を意識の上ののぼらせてはならぬ。感謝も意識してしまへば私が初めに他の道徳意識について申しましたのと全く同じ結果になつてしまひます。『宅の子は幼稚園へ行く様になつてからお辭儀を五十度する様になつた』とか『此頃は、いやに黄色い聲を出して口に數度か嬉うれしいといひます』とか又は『身振りを盛にして有難がる』とか云ふ様になつては、すでに出發點に於て誤つて居るのであります。實に一步をあやまれば意識なしに、もたせたいと思ふ此の感センシ謝性も、うれうれしが、る性も反つていやに感傷性センチメンタルなもの

になしやういので充分之は注意しなければなりません。とかく感謝を故意わざとらしくさせるのでなく矢張り無意識の中に其本來の美しい性を持たせたい。「好意の感受性」を意識させる位ならば寧ろ正直とか親切とか云ふ徳目を意識させた方が淡白で誤りが少ないと思ふ。それ故、子供にこの望む様な性格を眞實に與へるにはどうすればよいかと云ふ事が問題になります。子供に向つて、ありがたがるお稽古や御禮の練習とか「感謝ごっこ」などをさせてはそれこそ反つてひどい害を來させよう。

そこで先づ私の考へて居る所を申しますと、第一に子供が好意を表する時に——たとひそれが如何に小さな事であるにせよ、また其結果は反つて此方には迷惑な事になるにしても——取敢へず、敏感にこれを受取つてやりたいと云ふ事であります。よく『子供が質問する時には一々親切に答へてやらなければならぬ』と申しますが、それより

も尙必要のこととして、子供の好意は一つ残らず受取つてやりたい。質問に一度答へなくても子供はまた其智識を得る機會はありませう。しかし好意は一つ之をにがして受取らずにつきてはなせばもうとりかへしがつかない。それだけ子供のこの感受性をそこなふものです。さりとて其受け取り方はどうするかは問題で、たゞ『やあよく好意を表はした、うれしい』などと涙を振つても困ります。形にあらはすと云ふ事は必然の事ではない、子供に對していつも好意を受けてやりたいと云ふ心さへあれば其處に無言の中に眼の光にも顔の色にも子供に満足をかへす事は出來ませう。たゞ子供は好意を表はす時その發表の仕方が間違ふ事があります。例へばお母さんがお仕事をしながらしきりに銚を探して居る、側に居た子供は之を見て「母さんは何か探していらつしやる、きつと物尺が御入用なのだらう」と思つて物尺をもつて行く。すると母親は今銚がなくて氣がイラ／＼して居る所と

て「何だね物尺ぢやない、銚がいるのぢやないか」と怒鳴る。この時子供のやさしい心はもぎ折られて「しくちつたな」と思つて引込んでしまふ。もし子供が理屈屋ならば「何だ間違ひは間違ひ、好意は好意ぢやないか」と云ふ所でせうが子供はそんな事は云はない。だまつて引込んでしまふ。とかく大人の生活は結果が主となつてゐて好意そのものを感しない。世の中が忙しくなればなる程かゝる傾向になりませう。私共は先づ子供のやさしい心を受取つてやりたい。随分迷惑な事でも取敢へず其好意を受取りたい。大人同士の間ですと義理もあるので外面的にあまり好意をしりぞけない様には見せかけて居りますが、強者が弱者に對した時即ち大人が子供に對し、或は大人の間でも主人が召使に對した時などは、好意をすげなく退けると云ふ事を平氣でするのであります。これがどれ位子供の「好意の感受性」の發達を妨げるかわかりませぬ。子供が好意を發表する度に受取られる事は彼

等にとつてどれ位愉快な事せう。いつも誰か々  
すぐ受けてくれると云ふ事は實に彼等を幸福にし  
ます。一體に神經組織の繊弱な彼等子供にとつて  
受け入れられざる好意がどれ位彼等を害するかわ  
かりません。彼等の胸ハートに一つの空虚ウツロをつくつてし  
まふ。これが子供をすぐに悪くするとは行かずと  
も害する事は慥です。此點は母親も保母も餘程注  
意しなければならぬと思ひます。勿論我々人間  
の事ですから何時も子供を満足させて置く事は出  
來ないでせう。時には彼等を失望もさせませうが  
外の事で子供を失望させる——例へば充分玩具を  
買つてやられないとか、忙しくて質問に答へてゐ  
られないなど——事は止むを得ないのですが、し  
かし彼等がポツリ／＼と時々表はして來る好意を  
退けて、それで彼等を失望させる事はあつてはな  
りません。これは母親自身、また保母自身が細心の  
注意をはらはなければならぬ事で、「今忙しいか  
ら、面倒くさいから、腹が立つて居るから好意な

どうけてゐられぬ」と云ふ事は許されません。忙  
しければ忙しいなりにも子供の好意を受け取る方  
法はありませう、形にあらはさずとも充分受け取  
り得ることは出来るものです。

今一つの方法的實際問題は「容赦」と云ふ事であ  
ります。一體これまでよく云はれて居る子供の教  
育方法としては（一）訓戒する事、（二）罰する事、  
（三）賞讃する事の三つが主なるものになつて居り  
ます。近頃また此問題をやかましく云つて賞を與  
へるのは危険であるとか罰はいけなとか種々申  
しますが要はやはり此の三つであります。しかし  
私は我々の子供に對する態度の中に今一つもつと  
大切な事があると思ふ。それは容赦と云ふ事です。  
此迄とても容赦は考へられないではありませんが  
それは罰の結末としてしか思はれてゐない。「容  
赦」自身の教育効果はあまり考へられてゐません。  
しかし私は罰の結末でなしの「容赦」が子供の心に  
如何に響くかを思はず居られません。叱つたあ

とに赦されても勿論子供は嬉しいと思ふでせう、  
赦されないよりは嬉しいに違ひない。しかしこれ  
は赦された事が嬉しいよりも罰を免れた事が嬉し  
いので、丁度借りた金を返して其證文を破つた時  
の嬉しさと同じでせう。赦されて其時のがれ得る  
苦しさは、それは罰の苦しさであります。どうせ赦  
すなら初めから罰なしに赦すことは出来ずまい  
か。先づ罰を與へて、『今から三分たつたら赦して  
やるぞ、どうせ赦すのだから虐め序でにとしく／＼  
虐めて置かう、そして成るだけ赦しの有難さを感じ  
させ様』と云ふ方法がなかく／＼多いのでありま  
す。けれども「容赦」の教育効果は罰の結末として  
でなしに、罰なしに初めから赦してやると云ふ所  
に真にあるのです。例へば遊戯室で子供が遊んで  
ゐる、ふとピアノが弾きたくなつて弾いた。丁度其  
處へ先生が何氣なしにはいつて來た、子供はハッ  
と思つてピアノをひくのをやめて先生を見る。「子  
供はピアノをひいてはいけないもの」と云ふ事を

その子はよく承知して居るのであります。この時  
の子供の表情は實にみにくいもので、叱り手が來  
たと思つて先生を見るのでせう。この時先生が「い  
けないねえ、今に赦してはやるが、しかし、いけな  
い事をした」と云はずに黙つてニコリと初めから  
赦してやる。この時子供はポカリと間が抜けて其  
處に美しいあるものが湧き出る。叱られると思つ  
て緊張してゐた心がフットゆるむときに、其處に  
何とも云へぬ美しさが湧き出るのでせう。また例  
令ば子供が鉄を弄んでゐる。「切つてはいけない」  
と云ふ事は知つてゐたがつひフト着物を切つた。  
この時に子供は其の切れた所を見つめないで、す  
ぐ母さんの方を見つめる。其母を見ると云ふ心は  
實に可愛相なもので、もう、この心持だけで、何に  
も云はなくても澤山なのです。この時に母親が「だ  
から云はない事ぢやない」などと云はずに「オヤ、  
切つたの」と、せめてたゞこれだけを云つて「サ  
ア縫つてあげませう」と云へば其時にこの子供の

心にはどんな美しいものが現はれて來るでせう。

罰があるから「容赦」があると云ふのはこれは古のユダヤ思想です釋迦の生れる前の思想です。初めから容赦、途中も容赦、終りも容赦でありたい。容赦の中に生きて漂ふて居る感こそ、實にそこに大きな教育効果があるのです。悪い事をして罰なしに許された其感じは實に柔かいものであります。この經驗を子供に幾度も與へると子供は何時となく嬉しい感じを性格にして、先程から申上てゐる所の私の望む氣持に子供を近づける事が出來ませう。

餘りに道德教育に熱心な人の間に育てられると人間はいぢけてしまふ。此處にも道德が待ち伏せては居らぬか彼方からは道德が追ひかけては來ぬかと何時もビク／＼して少しものんびりとした所がなくなつてしまふ。凡べての人が自分に好意をもうて呉れるもの、容赦の世界に漂ひ包まれて居るものと云ふ事を意識せず、自然に子供の性格の

中に與へられれば子供は實にのんびりと育てて行きませう。『かく育てたしと思ふこと』の一つが此處にあるので私は自分としてやつと今此處に落付いて來たのであります。扱斯くの如く何となくうれしい、明るい氣持をもつて育てて行く子供の行末は果してどうなるでございませうか。必ずしもこの好意の感受性の有無で出世の道や社會的地位がきめられるわけでありませぬから謂ゆる成功者になるか否かは請合ひませぬが、幸福な人間になる事は確です。もとより好意と容赦の間に保護されてゐる世界から此の荒い社會に乗り出せば、到る所に好意を退け罰をあたへる多くの敵が狽狽して居るでございませう。しかしその人の生活の根底にすでに好意の感受性が養はれて居れば失望しながらも、一寸不平は起りながらもうれしさの感じは消えるものではありませぬ。實に私はこの育て方が人を幸福にする根本であると思ひます。今日は後に面白いまた有益なおもちや繪の話がございませぬから私の話はこれで止めて置きます。(筆記)